ことぶき「なか」だより
No.204
2024.3

発行所　日本キリスト教団　なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 205
Tel.（045）671-1109
振替　　00200 － 1 － 47369
E-Mail : naka-ch@hb.tp1.jp　　HP：http//church.jp/naka/
発行者　なか伝道所／編集委員会　　（題字　松橋 順）

宣教方針　① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。
集会　主日礼拝　日曜日（第1・第3はリモートあり、
第4 自主礼拝、教会暦による変更あり）
午前10時30分より

寿とともに

今冬も、伝道所の仲間たちが寿越冬活動に参加しました。また、越冬以外でも長年行ってきた昼食奉仕、こども保育などのお話もしていただきました。その生の報告を是非お聞きください。

「炊き出しの列に並ぶイエス」フリッツ・アイゼンバーグ作

寿越冬を終えて

沓澤則子

なか伝道所がある「寿町」と呼ばれる寿地区は、約三〇〇メートル四方に簡易宿泊所（ドヤ）が建ち並ぶ、日本三大ドヤ街の一つです。四〇年程前は「日雇い労働者の街」と言われていましたが、いちばん新しい統計によると六五歳以上の高齢化率は五五・三パーセント。日本全体では二九・一パーセントなので、かなり高齢化率の高い地域となっています。それは、四十年前の日雇い労働者が高齢化したという訳ではなく、どこかの地域で、生きていくことが難しくなって、寿町に移り住んだ単身高齢者が多いのです。その事情は、職を失うなどで生活が困窮したり、施設やグループホームになじめず出てきたり、精神科など長期入院後、退院するにあたっての住居設定など、様々です。中には、路上生活を経てドヤに入る方もいます。

今年も昨年の暮れから一月三日まで「越冬」と呼ぶ活動が行われました。毎年、年末年始の役所や病院が休みの期間、公園に大きなテントを作り、炊き出しやパトロールが行われています。その期間「臨時宿泊」というものがあり、食事と宿泊施設やドヤの部屋が用意され費用は無料です。

毎週火曜日の夜回りで出会う、野宿生活が長いHさんにも、毎年その時期になると臨時宿泊を勧めるのですが、「炊き出し？そんなもん食えねえよ。越冬？ドヤだろう、あんなとこ行かねえよ。」と、断り続けられていました。そのHさんが越冬二日目にテントを訪ねてきました。「よぉ！」とHさん。私は思わず「え？どおしたの」と。Hさんは、少し照れたように臨時宿泊を希望され、私がドヤに案内しました。空いていた部屋は、エレベーターが無い四階だったので、階段を昇りながら、腰痛持ちのHさんの気を損ねるのではないかと心配になりました。しかし、部屋に入ると「お、テレビがある。ちょっとつけてみてよ。部屋あったかいね。」と気に入ったようすです。越冬期間中はテレビを観てゆっくり過ごせたとのことでした。

一月四日の集団生活保護申請にも行き、無事にドヤに入居することができました。前の年の越冬で、臨時宿泊はしたものの、その後路上に戻

り凍死された方がいました。そのこともあって、私たち夜回りのメンバーは、これでHさんが、少なくとも寒さや飢えで亡くなることはないと、ホッとしました。Hさんは、いつも強がりを言っていたけれど、野宿生活が長くなり身体も気持ちも限界だったのだろうと推測します。今度会ったら、寿に来る決心をした訳を聞いてみようと思います。

夜回りで出会う、今は自力で何とか生きている方たちがいます。そこにいる理由は様々で、私たちが立ち入れない事も沢山ありますが、困りごとがあれば一緒に解決に向けて考えて、SOSが出たらすぐに対応できるそんな関係を細くても長く続けていけたらと改めて思いました。寿において、越冬、炊き出し、夜回り、は命を守る大切なものです。

いっしょに食べる、たのしさ、おいしさ……

ことぶき福祉作業所の昼食作り

岩岡千恵子

朝一〇時から支度を始めます、「おはようございまぁーす！」皆さん黙々と仕事して、笑みを浮かべながら気持ちよく挨拶をかわしてくれるのです。

今日のメニューは麻婆豆腐、味噌汁（うすあげと青菜）、もやしと竹輪の和え物です、ご飯は大きなガス釜で作業所の方が炊いてくれます、トントン野菜の切る音、味噌汁、そして葱、生姜、にんにく、ひき肉を炒めるおいしそうな香りにおいがしてきました。食器、鍋の音がガチャガチャと活気よい台所の感じです。食前に作業所の代表の方から感謝のご挨拶をいただき、手を合わせ、「いただきまあーす！」といって食べます。やはり大勢で食べると味もひとしおおいしく楽しいですね。

この昼食作り奉仕のきっかけになったのが、（「なか」だより二〇〇一年一月十二日発行の八十八号）。神奈川教区より職員として派遣された野々村さんからの意見で、「一緒に作業しても昼になると、それぞれが背中を向け合って自分の食事を食べる、お金のない人は食べないでいたりする。月に何回でもよいから、同じものを一緒に食べる機会がほしい」というものでした。この訴えを受け止め、教区の教会、婦人会等に呼びかけ、月に一回から、交代で担当することになった。という昔の記事を読んで、この奉仕は（コロナ流行時を除いて）もう二〇年以上脈々と引き継がれていることに感心しました。

今はできたものを買って食べられる時代だからこそ、少しでも香り、匂い、家庭的な雰囲気で、味わっていただけたらと思います。また私たちも食べやすいことはもちろん、バランス、季節の旬のものを献立にいれ、心がけようと思います。そして何よりも作業所の方々との交流を大切に、楽しいひと時を過ごしたいです。

そう、こんな思い出話あります。いつもの食前の挨拶で、二〇〇〇年当時、「所長」の愛称で呼ばれている矢島さんが満面の笑みで、「今日の昼食担当は、中山道のみなさんです。」と紹介され、大笑いに…。なか伝道所を「ナカセンドウ」と…楽しいひとときでしたね。

寿二〇二三年～二〇二四年 寿越冬闘争

山口雅典

昨年は準備期間が長くなりました。一二月一七日の統一作業から始まり、テント設営及び厨房テント設営など様々な事を少人数でこなし、テント内をいかに快適にスタッフやボランティア団体などの人々が過ごす事が出来るか考えながら作業をしていました。又昨年度は電気設備の設営などは少しだけ確認して行いました。最初に全ての距離を測ってワイヤーを引き、高さを調節した後、ケーブルなどを接続し、点検して安全面にも対応した仕様によって過ごしやすくなる様にしていました。二年前と比べて少し変わった所は、本部テントの位置が多少ずれていた事と医療テントを設営しなかった事です。

年末の三〇日から始まった越冬には多くのボランティア団体又遠方から来られた方々には感謝しています。そして教会関係者の方々からの多くの支援物資など様々なカンパに感謝します。

朝から積極的に参加された方々、

ありがとうございました。

寒い中野菜など洗うものが多く大変だったと思います。又野菜などの切り込みも野菜の種類によって多少大きさが違うため苦労したと思います。ボランティアの皆様が普段御自宅で料理するのとは少し違い、驚きを持ったと思います。この寿と言う所は年配の方が多く食事をする時はなるべく野菜など細かく栄養が取れるように小さく切ります。又、夜の人民パトロールに持って行くスープなど様々な装備品を、車や近い場所ならアルミリヤカーに、衣類や毛布、そしてカイロなどいろいろな装備を積んで行きます。

パトロールは3班編成で横浜駅、関内地下道から横浜スタジアム周辺、そして広域、などに別れ毎夜八時に寿公園を出て行きます。

皆様のご協力有難うございました。これからも宜しくお願いします。そして毎週行う炊き出しにも、変わらぬご協力をお願い致します。

ことぶき学童保育
～「学童」から「こども広場」へ～

渡辺幸子

昨年の五月末、生活館三階にあった「学童」（正式名称は「ことぶき学童保育」）が四十年の歴史に幕を下ろしました。保護者から保育料をもらわない「学童」の財政はいつも火の車。横浜市からの補助金だけでは足りないので、自治会から多額の援助を受けて運営が成り立っていましたが、その自治会も財政難で、今後の援助が打ち切られることになりました。また、登録児童数が減少して、市からの補助金も減額されることに。いろいろな問題が重なって運営委員会の三役が辞任するという非常事態の中で、後に残った運営委員は断腸の思いで閉所を決断したのでした。

「学童」は、中学生までの子どもなら誰でも来られる、子どもたちの居場所でした。工作をしたりホールで遊んだり、畳の部屋でビデオを見たり。ずっと寝ていてもOKで。いつ来て、いつ帰るかも自由で。だから、おやつだけもらって帰る子がいたり、待ち合わせ場所になったり。

時には卒業生が仕事帰りに寄ってくれることもありました。なぜって、子どもたちの問題に向き合っていこうとした大人たちの思いから生まれたのが「学童」だったからです。行事もいろいろあって、夏休みに行われるキャンプは最大のイベントだったし、クリスマス会や運動会は、卒業生たちが久しぶりに再会できる貴重な機会でした。

閉所後には「学童」が使っていた備品も、飾ってあった子どもたちの作品も処分されてしまうという、つらい現実が待っていました。その後の子どもたちの受け入れ先となったのは、生活館二階にある「青少年広場」と、のりたま（山埜井さん）の「勉強会」です。〝それでも「学童」みたいに誰でも来られる場所が必要だよね〟という声が上がって、何人かの有志で「がくどう広場（仮称）」を立ち上げました。最初は「青少年広場」がお休みの毎週木曜日にと考えていましたが、できるところから始めることに。で、昨年の七月から、第一日曜日の午後一時～五時までに月一回のペースで行なっています。

その日にどんな遊びをするかは、今はお父さんになった学童の卒業生ご夫婦が中心になって考えて子どもたちと遊んでくれます。サッカーしたり、ドッチボールや卓球をしたり、コマ大会や豆まきもしました。その他、夏にはプールへ行き、三月にはスケートを予定しています。

私は主におやつの担当ですが、コロナ下で休止していた子どもたちのおやつ作りを復活しました。パンやホットケーキ、季節に合わせてクリスマスケーキやバレンタインのチョコ作り、また、新年には白玉も作りました。でも、せっかく材料を用意したのに、子どもたちがあまり集まらないこともあります。月一なので、その日に他の予定があると来られないし、友だちが来ていないと帰ってしまうことも・・。子どもたちが自由に集まる場所なので、仕方がないことなのでしょうね。けれど来てくれた子どもがいたら、その子にとって「広場」は必要な場所。やっている意味はあるんじゃないかなって思います。「楽しかった！」って思ってくれたらいいなあ～と願いながら、試行錯誤で続けています。

寿　越冬報告

小笠原敦輔

一月三日、なか伝道所の代務教師をしてくださっている中村牧師と寿中央公園で待ち合わせをして、越冬での炊き出しの状況を見学させてい

ただきました。寒風の中、なか伝のメンバーを含め、ボランティアの方々が心を込めて切り込んだ野菜と肉から、おいしいカレーライスができあがりました。夏祭りで友達になったTさんも友人と一緒に二回並び、おいしそうに食べていました。最後にルーだけ残っていると聞き、私も並んでそれを頂いたら、和食用のうまみが効いた味になっており、ご飯なしでも、おいしく食べられました。

寿日雇い労働者組合の、近藤さん、由良さん、そして、看護師の森さんがお元気でご活躍されていて、寿の息の長さを感じました。そして、ぐっさん、（伝道所の山口さん）が、越冬でも夏祭りでも、普段の炊き出しても、なくてはならない存在であることを感じました。

風景

よきサマリア人の衝撃！

梅北陽子

先日のなか伝道所の礼拝では、「よきサマリア人」の話で大変な衝撃を受けました。身体中の力が抜けるくらい！

サマリア人は、はらわたがえぐられるほどの感情に突き動かされて裸で誰ともわからぬ強盗に襲われた人を助けます。ところがエルサレムからエリコへと向かう道は山道で、危険極まりない道。サマリア人自体もそばに強盗がいて、襲われる可能性があった中での行動でした。

いつ強盗に出くわすかわからぬ道を応急処置を済ませた瀕死の怪我人をロバに乗せて運びます。

宿屋につけば一安心なのではなく、当時のこのあたりの宿屋もまた危険な巣窟だっただろうということでした。

サマリア人は、かかった費用とこれからかかる費用も渡して瀕死の怪我人を宿屋に全て任せて去ることも出来ました。けれどそうはせず、帰りには立ち寄って報酬を払うと宿屋に言います。

これは当時の意味合いでは「この人を酷い目に遭わせるなら、報復するぞ」という含みがあり、この人の命を守るための命がけの選択肢だったようです。

波瀾万丈、どうするサマリア人！どうなる瀕死のけが人！と、臨場感がすさまじい話でした。そして世界的に見れば、無数の膨大な数のよきサマリア人が存在した一方で、中には命を助けようとして自らが殺されたり、怪我や略奪にあったりした、そんなサマリア人も多数にのぼり存在したのではと考えざるを得ません。

その考えの衝撃で一時的にも身動きができなくなったのではと、自分では思っています。

今こそは強盗がはびこる世。こんな世で命をまさに奪われようとする者と、まさに命をかけて助けようと、一歩間違えば死ぬことさえあり得る者たちがいる。そして差別がある。

こんな世でいいのかと発題者は問いかけていたように思います。

百年前の関東大震災時の大虐殺を扱った「福田村事件」の映画で、被差別部落から来た行商の一行が朝鮮人かと疑われ、それに対して団長が、

「日本人でなければ殺していいのか」

正論を言った次の瞬間、殺され、そして女性、子どもを含めての虐殺が始まり、半数が殺されました。

もう一人の「良きサマリア人」が映像の中に映し出されているように思いました。

で、どうしてサマリア人なの？一般庶民○○人でもよかったのではないの？

そこには、当時の社会構造に対する批判を皮肉をこめて、聞く人たちにはわかるチクッとしたスパイスのように、イエス様がわざわざ差別されていたサマリア人を主人公にしてドラマチックに物語を仕上げたのでしょう。

当時を想像して、当時の民衆の方々が夢中になって、話の中に引き込まれていっただろうと想像すると、感動もひとしおです。

＊＊＊＊＊

テキスト：　山口里子著　『イエスの譬え話2』　第8章「サマリア人」

山口里子さんは誰が隣人になりましたか？としてサマリア人をみならいましょう？という単純な話ではないと解いています。

発題：　小笠原敦輔　礼拝の使信の時間に発題を行い、出席された皆さんと質疑応答の時を持ちました。

使信（ししん）

「飼い葉桶の乳飲み子」

ルカによる福音書 二章一〇～一四節

渡辺英俊

…天使は言った。「恐れるな。わたしは、[……あなたがたに] 大きな喜びを告げる。今日 [……] あなたがたのために救い主がお生まれになった。[……] あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ。」

（ルカによる福音書二章一〇～一四節）

もう一つの「クリスマス物語」

ルカ版のクリスマス物語（二章一～二〇節）には、ルカの脚色の元になった、もう一つのクリスマス物語が隠れていると私は考えています。

ルカは、「ダビデの子孫から生まれた王なるメシアとして、ダビデの町ベツレヘムで生まれたキリスト」という、ルカの教会の信仰を枠組みにして、物語を構成しています。そのため「ローマ皇帝による人口調査」とか、「宿屋が満員」とかいう架空の設定を加えました。

しかし、このようなルカの物語設定からハミ出している部分に、もっと大切な事柄が語られているのではないか、二章八～一四節は、その匿れた伝承の中心部分ではないかと思われるのです。ルカの脚色に合わせた書き込みと思われる部分（前掲テキストの [……] の部分）を除くと、ルカ以前の伝承の大すじを読み取れると思います。前後の記事と合わせると、①マリアとヨセフが生まれた乳飲み子を飼い葉桶に寝かせた、②野宿をして羊の番をしていた羊飼いたちに天使が現れて、救い主が生まれた、飼い葉桶に寝かされている乳飲み子がその目印だと告げた、③羊飼いたちは飼い葉桶に寝かされた乳飲み子に会った、という物語です。これを、私は「羊飼い伝承」と呼びたいのです。

この物語を読み解くキーワードは、「羊飼い」と「飼い葉桶」です。当時のユダヤ社会で最も貧しくされて、家らしい家も持てなかった羊飼いたちの暮らしでは、赤ん坊が生まれたら布にくるんで飼い葉桶に寝かせるのが普通だったそうです。つまり、この伝承は、たぶん村はずれにあった羊飼いの、掘っ立て小屋のような「家」で、イエスが生まれたということを語り伝えていると言えるでしょう。

事情

ナザレの村の住民であったイエスの両親のマリアとヨセフが、羊飼いの家で出産を迎えることになったのには、深い事情があったはずです。マルコの福音書は、イエスの故郷のナザレで、人々が陰でイエスを「マリアの子」と呼んでイエスにつまずいたと伝えています（六・三）。人の名前に苗字のように父親の名前をつけて呼んでいた当時、郷里の人たちが陰でイエスを「ヨセフの子」でなく「マリアの子」と呼んだというのは、深い事情があってのことでしょう。つまり、マリアは、自分の住んでいる村社会では出産を迎えられないような、困難を背負って身ごもっていたということ、そして婚約者のヨセフが、彼女のこの困難を引き受けて、それを一緒に背負って村を離れたのだろう、ということです。生まれた村を離れたらたちまちホームレス状態になります。出産が迫って、二人がやっと泊めてもらえるところを探し当てた、それが羊飼いの家だったという事情が、ここでは推測されます。

そうすると、羊飼いが野宿をして羊の番をしていたというのも、別の事情が考えられなければなりません。マリアが出産して赤ん坊を「飼い葉桶」に寝かせたのが羊飼いの家だったとすれば、すぐ駆けつけた羊飼いたちも家の近くにいたのではないでしょうか。私は、羊飼いたちは出産を迎える二人のために、一間しかない自分たちの家を提供して、自分たちは近くで野宿したのだと想像するのです。これは、私がフィリピンで旅をして、貧しい人びとの中に生きているもてなしのこころに触れる体験をしたことから出た想像です。そこに、人間の中に本来与えられているやさしさの世界が映し出されているような気がするのです。「飼い葉桶の乳飲み子」と「野宿する羊飼い」とは、貧しい人びとの間に生

きている暖かさ、やさしさの物語として結びつくと思うのです。

愛の物語

「羊飼い伝承」のクリスマス物語は、愛の物語だと私は思います。まずその発端に、少女マリアの上に落ちかかった苦難を引き受けていっしょに担い、いっしょに旅に出たヨセフの愛があって、この物語は成り立ちます。ホームレス状態におかれたその何ヶ月かの間に、どんな苦難があったことでしょうか。その間、ヨセフは常にマリアと共に歩み、その苦難をわがこととして引き受けています。愛とは、理念や感情ではなく、このような振る舞い方をさせる力です。

もう一つは、出産間近になってどうしようもなく、二人が転がり込むように宿を求めた羊飼いたちの家で起こったことです。この物語の中で、羊飼いたちは、新しい命を迎えようとしている若い夫婦のために、家を空けてあげて自分たちは野宿するのです。ここで羊飼いたちは、二人の苦難を受け止め、引き受け、共に背負っています。この愛があって、「飼い葉桶の乳飲み子」という出来事は成り立ったのです。

この愛の物語は、「クリスマス」という出来事で何が起こっているかを、どんな豪華な飾り付けよりも端的に、証ししているのではないでしょうか。神の子は、ホームレス状態に置かれた親から、客を泊める部屋などない羊飼いの小屋で、最も貧しい姿で生まれ、飼い葉桶のベビーベッドに寝かされました。それは、神ご自身が、そのような貧しさの中に身を置き、人々の苦しみを引き受け、それを担っていっしょに歩いてくださることのしるしです。「飼い葉桶の乳飲み子」を実現させたヨセフや羊飼いたちの愛の振る舞い、やさしさは、そのような、引き受け、担い、共に歩んでくださる神の愛を映し出しているのです。

おそらく、羊飼い伝承は、イエスの運動に加わった貧しい人たちの中でも最も貧しい位置におかれていた羊飼いたちの間で、「イエスはオレたちの家で生まれたオレたちの神様だ」という信仰のしるしとして語り伝えられたものだろうと、私は考えているのです。教会のキリストになってしまう以前の、民衆のイエスへの信仰の一端がここに反映していると、私は思うのです。

最後に、この物語のハイライトになっている天使の歌に目を留めたいと思います。一四節は、「いと高きところには栄光、神にあれ」に続いて、

「地には平和、御心に適う人にあれ」

と天使の声を伝えています。「御心に適う人」と訳されているのは、「神の喜ばれる人間たち」という字です。神が「良し」として喜ばれる人間たちに平和があるようにと、神は最も低くされた人々の中に、人々の苦しみを引き受け共に担う方として、キリストを送られました。

最初のクリスマスの夜に、パレスチナの天から聞こえたというこの声が、この二〇二三年という時点のパレスチナの空にも響いてほしいと強く思います。今年のベツレヘムのルーテル教会では、例年の飼い葉桶に代えて、瓦礫の中に幼子の人形を飾っているそうです。本当に、「地には平和、人間たちにあれ」という天使の声を響かせてほしいクリスマスです。

（二〇二三年一二月二四日）

編集後記

やっと二〇四号をお届けします。今回は寿と伝道所の仲間との関わりを特集しました。また、山口里子さんの「イエスの譬え話2」の勉強会の感想を「風景」に載せました。英俊さんの使信はリモートでお願いしたものです。　敦